

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その16)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載十六回目となるこのたびは、第二十一章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続きDodo Pressの二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号:18K00329」による研究成果の一部である。

二十一章

ふたたびロナルド・アールは、イギリスの地を踏みしめた。ふたたび、まわり中の人々が彼の母国語を話しているのを聞き、そしてふたたび穏やかで美しいイギリスの景色の魅力をかんじていた。ロ

ナルドがドラの手を取り、後にのこしていくものは何ひとつ惜しくはない、大切なものはたったひとつドラだけだと告げてから一七年が経った——十七年もたったが、彼の愛と夢が続いたのはそのうちのたった二年だけだった！そして怒りと恥のせいで彼の判断力を失わせたあの恐ろしい衝撃が訪れた。そうして荒々しく夢から呼び覚まされた彼は、雄々しく真正面から人生に向き合い、もはや彼の夢がただの重荷でしかなかったことに気づいた——希望と野心は失われ、輝かしい夢の中ではどんなことでも彼には不可能に思えなかったあの大きな政治的野望も消えてしまった——そしてそれは何のために？それは——あのかわらしい顔に惑わされた正気の沙汰ではない、ばかげた愛情のためだった。その自らの弱さと愚かさを、彼は嫌悪した。それは——彼自身を強く恥じ入らせた、あのかわいらしい顔をした、愚かな女性のためで——彼は母の心を半ばこわしてしまい、父の人生をみじめなものにした。そのために彼自身を国にいられなくさせ、彼の周囲のすべてに微笑んでいたはずの人生において、青春時代を年老いた、疲れはてた無為なものにしてしまった。

急行列車が静かなイギリスの田園風景を駆け抜けるなかで、こうした思いが彼の脳裏を駆けめぐった。真冬の雪が降りしきり、高い樹木の枯れ果てた太い枝に雪がつもり、野原は雪一色で、垣根や木に下がる氷柱を霜が固めていた。長い年月、南国の太陽のもとで過ごしていた彼にとつて、この雪景色は不思議なものに思えた。それでも、きびしく凍りつくような空気は、彼に鋭気を与え、新しい生活へのエネルギーをもたらした。

ようやく小さな駅に到着すると、彼の館の従者たちが馬車とともに待っているのが見えた。温かい血の気が、アール卿の頬にさした。少しの間、彼は昔の使用人たちに出会うことを恥じた。今となつてはなぜ彼が家を離れたのか、皆が知っているに違いなかった。彼付きの従者であったモートンもそこにいた。彼はかつてアール卿の使用人であり、この昔の主を出迎える許可を得て来たのだった。

ロナルドは彼に出会えたことを喜び、使用人たちに温かい言葉をかけた後、モートンにはさらに親しげに話しかけた。幾度も夢に見た大きな杉や、広がった樫の木、高いアスペンの木、ブナにポプラを彼は再び目にした——そのすべてが懐かしかった。遠く、木々のあいだで湖がきらめいた。彼は広大な庭園と、今は冬枯れている果樹園のあいだを馬車で走り抜けていった。アールズコート館の塔と小塔が見えてきたとき、彼は傍目を気にせず熱い涙を流した。

鋭い痛みが彼の心を切り裂いた——それは苦い後悔、深い悔恨、何もかもなかったことにしたいという強い想い、彼の人生最良の時から失われたつらい年月の記憶——彼は戻りたかった。過ちを償うた

めにどんなことでもしたかった。だが後悔も、贖罪の念も、その誇りをゴミのように彼自身が卑しめてしまった父のもとに、彼を連れ戻してはくれなかった。

この馬車が広い車寄せに乗り入れるあいだ、彼の父親の愛情と恩恵が無数に思い出された——たったひとつの願いを除いて、父が聞き入れてくれないことはなかった。父は賢明にも優しく、すべてを無に帰してしまふ二度と立ち戻れなくなってしまう過ちに、彼が歩を進めないように説得してくれていた。

彼はあの朝、両手を広げて、自分の前から去つて二度と現れるなと命じ、いつか自分の死に顔を見た時には、死でさえもこの裏切りの瞬間ほどつらいものではなかったと思ひ出すように、と告げた父の顔を思い出した。

馬車が到着し、笑顔をつくつたり、涙を流したりしている昔の懐かしい使用人たちの顔を見たとき、ロナルドの心に悲しくつらい記憶がどつとよみがえつた。

書斎の扉は開け放たれていた。どこという当てどもなく彼が出て行き、アール卿が入ると、その扉は卿の後ろでピタリと閉じられたのだった。背の高い、堂々とした貴婦人が両腕を広げて、彼に近寄ってきたとき、彼の目は涙で曇つた。

記憶の中の、あの美しい落ち着いた顔には、悲しみの痕がくつき

りと浮かんでいた。あの誇り高く優しくかった瞳には影がさし、つややかだった髪は銀色に変わっていた。それでも、「ああ、私の息子、よくぞ帰って来てくれました！」と叫んだのは母の声であった。

どれほど長い間、母が自分を抱きしめていたか、彼にはわからなかった。この世に母の愛のようなものはない——それは、こんなにも優しく、真摯で、賢い知恵にあふれ、慈愛と許しにあふれたものだった。アール卿夫人が抱きしめていたのは彼女のたった一人の息子であった。彼女を困らせた息子であったことはもう記憶にはなかった。彼は彼女の息子で、彼女自身の宝で、だからその言葉はただ愛情に満ちた歓迎の言葉だけであった。

「あなたは何て変わってしまったことでしょう」と、急に陽が陰つていくなかで彼を引き寄せた彼女は言った。「ずいぶん日に焼けて、年齢よりも年をとったようで——悲しそうで、疲れ果てた表情ね！ああ、ロナルド、もう一度あなたを若返らせて幸せにしてあげなくては！」

彼は深いため息をつき、その不安げな表情は母の心も悲しくした。「昔の本の格言にありますね、母上。『幸せになるためには、人は善良でなければならぬ』と。私は善良ではありませんでした。」と彼はうつすら微笑みながら言った。「だから私は決して幸せになることはできないでしょう。」

消えゆくとする日没の光が雪を不思議に照らすなかで、母と息子は座り、語らった。アール卿夫人は、彼の父の死について語った——長いあいだ抑えつけられていた愛情が吹き上がり、叫び声になった。それは彼にとって小さな慰めになった。その最期の想いと最期の言葉は彼に向けられていたからだだった。

彼の心は不思議にも和らいだ。新しい希望が湧きあがった。人生最良の時は確かに失われたが、残りの人生にベストを尽くすことができるかもしれないのだった。

「そして私の子どもたちは」と彼は言った。「かわいそうな娘たち！私が落ち着いて元気を取り戻してから、会うことにしましょう。母上のもとで元気に幸せに暮らしているのでしょうか。」

そして機嫌のよいときを見はからって、ヘレナ夫人はずっと話しかかったことを口にした。

「ロナルド」と彼女は口火を切った。「私はずいぶん苦しみました。お父様と息子のあいだで心が引き裂かれた私はどんなに苦勞してきただか、あなたにはわからないでしょう。のこりの年月を私が穏やかに暮らせるようにしてほしいのです。」

「もちろんです。」と彼は言った。「母上の幸福を私は何よりも優先するつもりです。」

「私の心は」と彼女は続けた。「私たち家族の仲たがいすべて消えるまで休まりません。ロナルド、あなたに今までお願い事をしたことはありませんでしたが、今こそお願いします。ドラに会い、彼女をこの館に連れて来て和解し、幸せにお過ごしなさい。」

今まで彼女が見たこともないような暗い怒りの表情が、アール卿の顔に浮んだ。

「それだけではできません。」と彼は急ぎこんで答えた。「それはできません、例えば私が死の床に横たわったとしてもできないのです。」

「なぜですか？」と彼女は、ドラにそうしたように、静かに問いかけた。

「あらゆる理由からですが、第一の、そして最大の理由は、彼女が名誉についての私の考えを踏みにじり、私が尊敬し崇敬する人の面前で私の顔に泥を塗り、私の尊厳を貶めたからです。彼女は——いえ、妻の過ちについて語るのはやめましょう、男らしくないことでした。母上、彼女を許すことはできません。彼女を傷つけたいとは思いません。彼女には、私の財産でかなう限りの贅沢をさせてください、ですが彼女の名前を口にしないでください。もし彼女を許すことができようなら、私は完全にすべての誇りを失ってしまいません。」

「あなたは誇りゆえだと言うし」と彼女は悲しげに言った。「彼女

は怒りからだと言うのです！ああ、ロナルド、どうしたら終わるのです？やがては賢くおなりなさい。最も高潔で名誉ある人は自身を律することができる人です。自分を律しなさい、そしてドラをお許しなさい。」

「むしろ死んだ方がましです。」と彼は苦々しげに答えた。

「それでは」とアール卿夫人は悲しげに言った。「ドラに話したのとと同じことをあなたにも言わねばなりません——気を付けなさい。誇りと怒りは収め、消してしまわねばなりません。やがて警告を受けることになりましょう。」

「母上。」とロナルドは感情をあらわにして身をかがめ、割って入った。「これで終わりにしましょう。母上はご自身と私を苦しませていらつしやいます。この話を蒸し返すのはやめましょう。死の床で彼女を許せるかも知れませんが——それ以前にはありえないのです。」

ヘレナ夫人の最後の望はついていた。彼女は、彼が戻って、昔の記憶が彼の心を和らげるとすぐに、愛情を失ってしまった妻に会いに行き、子どもたちのためにその母親を連れ戻ってくるように説得するつもりであった。帰宅し、父親のことを思い出し、失われた青春と吹き飛ばされてしまった希望に間断なくふれてしまうことで、それらすべてを彼から奪った妻に対して、彼が心をより硬化させてしまうことなど、彼女には思いもよらなかった。

「もう子どもたちに会いたいでしょね。」とヘレナ夫人は言った。「灯りをつけてもらいましょう。あなたは二人の娘に魅了されますよ。ベアトリスはよりあなたに似ていて——アール家の顔立ちと、私の思い違いでなければ、アール家の精神も受け継いでいます。」

「ベアトリス」と、広い階段を下りながらリリアンは言った。「私は恐いわ。お父様のことを何か、声や笑顔などを覚えていれば良かったのだけれど。見知らぬ人に会いに行くようなものよ。そして、もしお父様が私たちをお好きではなかったら！」

「一番重要なことは」とベアトリスは誇らしげに言った。「私たちがお父様を好きになれなかったとしたら、よ！」

だが、元氣よく傲岸に振る舞ってはいても、書斎の扉が開き、アール卿夫人が近づいてきたとき、ベアトリスは震えんばかりであった。ベアトリスは物怖じせずに視線を上げ、堂々とした長身の整った顔立ちの目の前の紳士を見上げた。その顔は、彼女の見たこともない悲しみと気品を浮べていて——その澄んだ鋭い瞳は、どんな隠し立ても突き通してすべての考えを読みとってしまうようだった。

「こちらがベアトリスですよ」とヘレナ夫人は言い、彼女の手を優しく取った。ロナルドは目の前の、際立って美しい顔立ちと姿に驚いて立ちすくんでいるようだった。

「ベアトリス」と、彼は言い、誇り高い広い額に口づけた。「こん

なことがありうるだろうか？ きみを最後に見たとき、きみは小さいとけない子どもだった。」

「もう、いとけない子どもではありませんわ。」と答えて彼女は微笑んだ。「お父様が私をとっても愛してくださいと良いのですが、お留守でいらした十五年を取り戻してくださいと。私がお父様を好きになるのは難しいことはありませんわ。」

彼は彼女の美しさ——その率直さ、快活さ、恐れを知らぬ物言いに眩しさを感じた。そして彼は、愛らしい鳩のような瞳で彼を見上げてくる金髪の娘に視線を移した。

「私がリリアンです、お父様。」と冴えた音楽のような声が言った。

「私のこともご覧になって——そして撫でてください。」

彼は、彼女の優美で上品な立居振舞と、汚れを知らない美しい顔に魅了されて、言われた通りにした。そうして彼は二人を両腕に抱きしめた。

「私は」と、声を詰まらせて涙にくれながら彼は言った。「もつと前にきみたちに会いたかった。私の小さな双子の娘たちが美しい少女に成長したとは聞いていたが、よくわかってはいなかった。」

そして再び、彼の誇りに満ちた幸せな様子を眺めたとき、ヘレナ夫人は、やはり彼の愛を受けるべきははずの子どもたちの母親を呼ぶ

—— ように言いたかったが、
敢えてそうはしなかった。彼の言葉が頭を
よぎったからだ。ドラは死の床になって初めて許されるのだろ
う。(以下、次号)